

# 千葉県における縄文後期の釣手土器について

蜂屋孝之

## 目 次

1. はじめに .....	113
2. 千葉県内の諸例 .....	113
3. 形態 .....	125
4. 分布 .....	126
5. 出土状況 .....	127
6. 時期 .....	128
7. まとめ .....	129

## 1. はじめに

縄文時代中期に房総半島に住んでいた人々は、土偶などの精神世界にかかわる道具をあまり必要としていなかったようである。長野県を中心とする中部山岳地域にみられる縄文時代中期の土偶や多様な土製品の出土量に比べ、房総半島のそれらはあまりに数が少ない。精神的活動の有り様は、考古学的には遺物の種類や多寡をもって推測することしかできない。それ故に房総半島の中期縄文人の精神性を具体的に物から探ることは難しい。本稿で扱う釣手土器もその特異な形態から精神活動の一端を担った道具であったことは容易に推測できるが、房総半島では、今のところ中期には1点の出土例もない。釣手土器は、中期勝坂式期に八ヶ岳西南麓で発生したとみられ、急速に周辺地域に採用され関東西部まで波及する。しかし、荒川の下流域を境にそれ以東の房総半島には及ばなかったようであり、房総半島は中期の釣手土器分布圏からまったく外れてしまった地域となっている。ところが、後期の加曾利B式期になるとそれまで皆無であった釣手土器が突如として多量に出現し、後期後葉までその存在を追うことができるようになる。

すでに中期の釣手土器の様相については、形態や分布、変遷について拙稿で述べたことがあり<sup>(1)</sup>、その後綿田弘実氏や新津健氏によって長野県や山梨県の資料集成が行われ、出土状況や使用痕などについてさらに詳しい検討が加えられている<sup>(2)</sup>。また、後期の釣手土器について、先頃全国的な集成を行って形態や分布、変遷などについて検討しており、後期の釣手土器のあり方についても概略をつかむことができたと考えている<sup>(3)</sup>。本稿では、後期の釣手土器の中で全国で最も出土例の多かった千葉県内の諸例について再度集成を行い、小地域の特性を探ることにしたい。

なお、釣手土器の名称については、「吊手土器」や「香炉形土器」などとも称されるが、前稿と同様に「釣手土器」の名称に統一してすすめることにする。釣手土器の形態分類については、前稿の形態分類に準ずることにし、ここでは分類についての詳しい説明を省略することにしたい<sup>(4)</sup>。なお、掲載した実測図及び拓本については縮尺を3分の1に統一し、一部の実測図には加筆・修正を加えている。写真資料は任意の縮尺で掲載している。

## 2. 千葉県内の諸例

前稿で行った後期の釣手土器の集成では全国で65遺跡、258例あまりを確認することができた。関東では千葉・東京・埼玉・茨城・栃木の1都4県、東北地方では6県全てから出土例が見られた。また新潟・山梨・長野の甲信越地域や石川・富山などの北陸でも僅かだが出土例がある。このうち千葉県が17遺跡・131例で抜きんでて出土例が多かった。今回改めて千葉県内の出土例を集成したところ30遺跡から総数225例を上回る数の釣手土器が出土していることが判明した<sup>(5)</sup>。ここでは数多くの釣手土器が出土した遺跡や特異な釣手土器が出土している遺跡について若干ふれることにしたい。

### 市原市能満上小貝塚 (第1図 1~22)

中期後半から晩期前葉までの堅穴住居跡が36棟、土坑158基が検出されている。釣手土器は22例出土し

ており、土坑から出土した1例を除いて包含層の出土である。鉢部の出土例はなく釣手部に限られている。釣手部の形態は類似したものが多い。釣手頂部に付けられるお猪口状の装飾4点(4・18~20)は、貫通孔が伴っていないことから、異形台付土器などに伴う装飾の可能性がある。縄文施文の例がみられることから、時期的には加曽利B2式~加曽利B3式にかけての釣手土器が主体ではないかと思われる。その他の土製品については加曽利B式期の土製品が少なく、晩期の土偶、土版、耳飾、動物形土製品、手燭形土製品などが豊富に出土している。

#### 市原市祇園原貝塚(第2~5図 23~101)

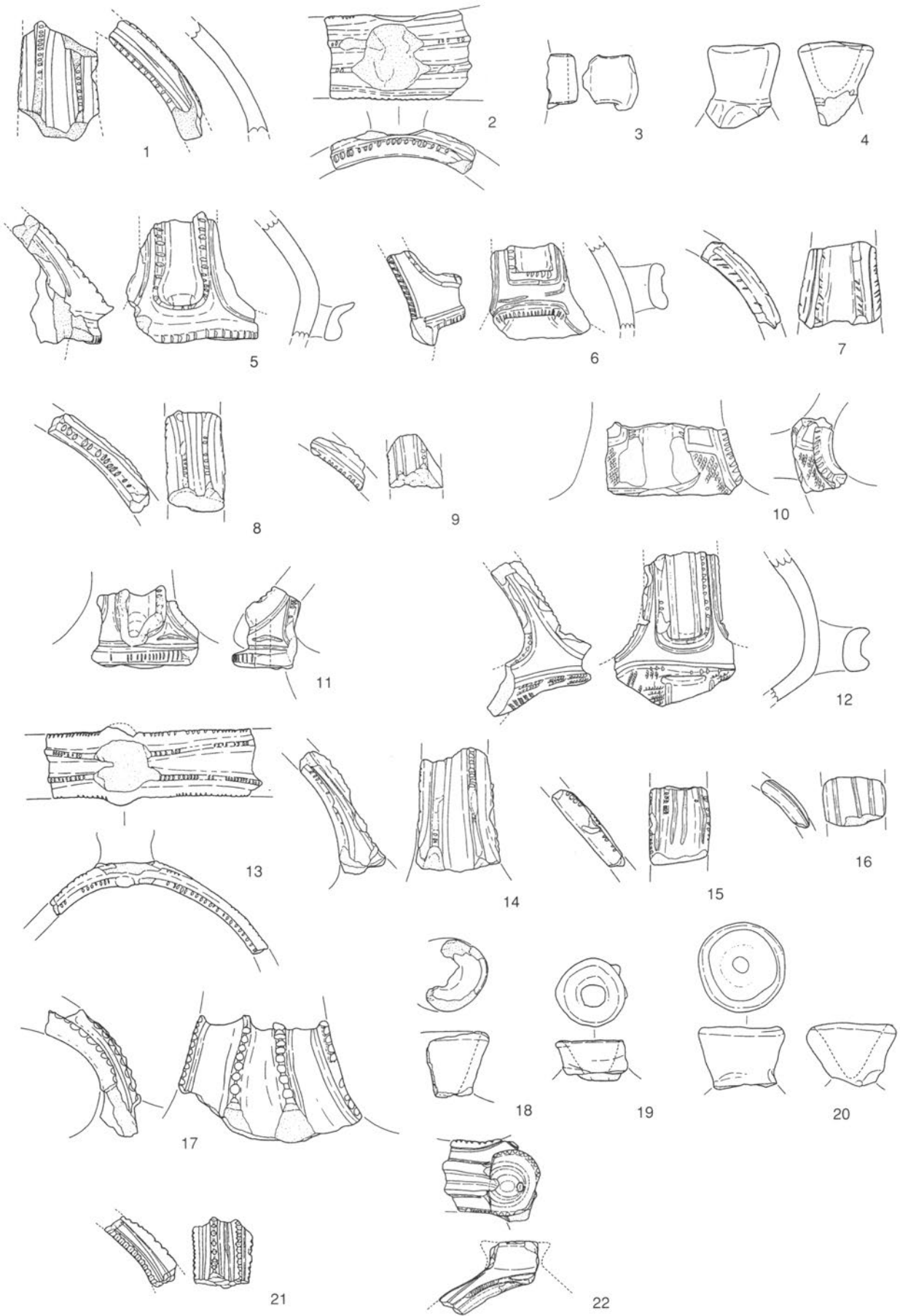
後期から晩期にかけての竪穴住居跡51棟、土坑369基などが検出されている。上総国分尼寺の造営によって大規模な整地作業が行われたため、貝層は大きく取り払われてしまった可能性が高い。本来は環状乃至は馬蹄形の貝塚であったと考えられる。釣手土器は全国的に見ても最も多く出土しており83点が報告されている。前稿の集成では、釣手土器とするには疑問のある個体を除いて66例として扱っている。余りにも多い出土点数であり、隣接する大規模貝塚の西広貝塚などと比べてもその差は歴然としている。9棟の竪穴住居跡から19例が出土しているほか、土坑2基からも釣手土器が出土している。釣手土器の時期については、遺構内からの土器が多型式にわたっているため竪穴の時期が明確でない上、出土した釣手土器が竪穴に本来伴うものであるのか判断が難しい。包含層の出土例を含めると加曽利B2式と判断できるものは少なく加曽利B3式~安行1式が主体となるようである。遺跡から出土したその他の遺物としては、土偶、土版、耳飾、異形台付土器、手燭形土製品、石棒、石剣などが出土しており、拠点集落と言える多様な遺物が見られる。

#### 千葉市内野第1遺跡(第6図 106~117)

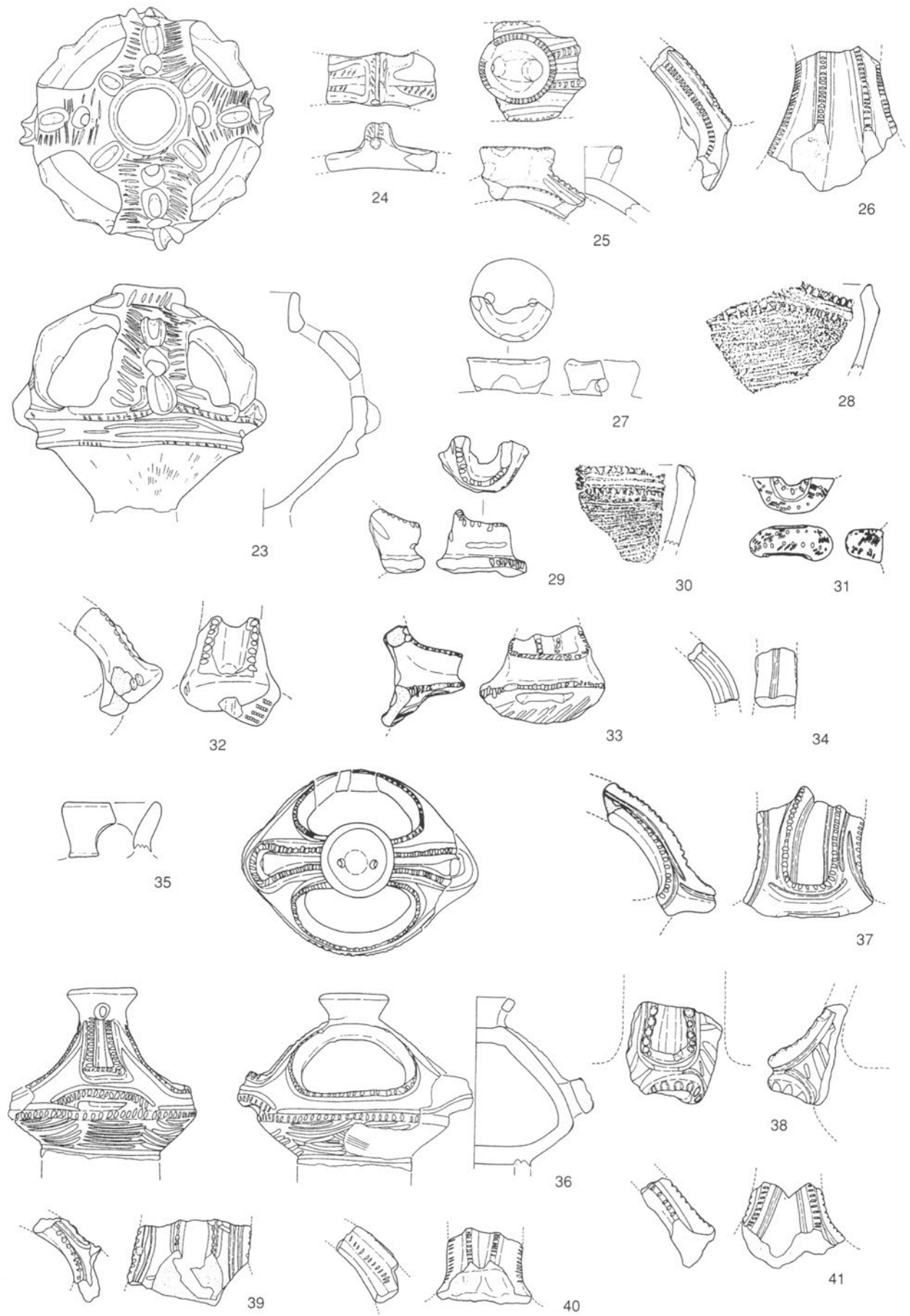
中期後半から晩期の竪穴住居跡125棟、土坑427基が検出されている。釣手土器は、12例出土しており、完形品は出土していない。このうち9点が6棟の竪穴住居跡から出土している。6棟いずれも覆土に多型式にわたる土器が含まれており、竪穴の時期を決定しにくい。釣手土器が出土した竪穴6棟の時期は、加曽利B2式~安行2式までの後期後半に属すると考えられる。遺構外から出土している釣手土器3点も後期後半の加曽利B2式~曾谷式の時期にあたると思われる。紐を通すための把手を釣手の付け根に施した例に限られる。釣手部の形態は、鉢部の器厚とあまり変わらない平べったいものが主体を占める。幅の広い釣手の場合は両側縁を鏝状に縁取り、さらに懸垂用の紐がずれないように2条の突帯を釣手中央に貼り付けている。やや幅の狭い釣手では、側縁の鏝状の縁取りだけで紐ずれを防止する突帯を貼り付けないものも見られる。117の鉢部は口縁が鏝状に張り出している。釣手頂部が欠損しており、頂部には皆お猪口状の装飾が伴っていたと思われる。その他の特殊な遺物としては、土偶340点、土版21点、耳飾114点、異形台付土器35点、手燭形土製品2点、石棒114点、石剣135点などが出土しており、拠点集落と言える豊富な遺物が出土している。

#### 小見川町良文具塚(第6図 120)

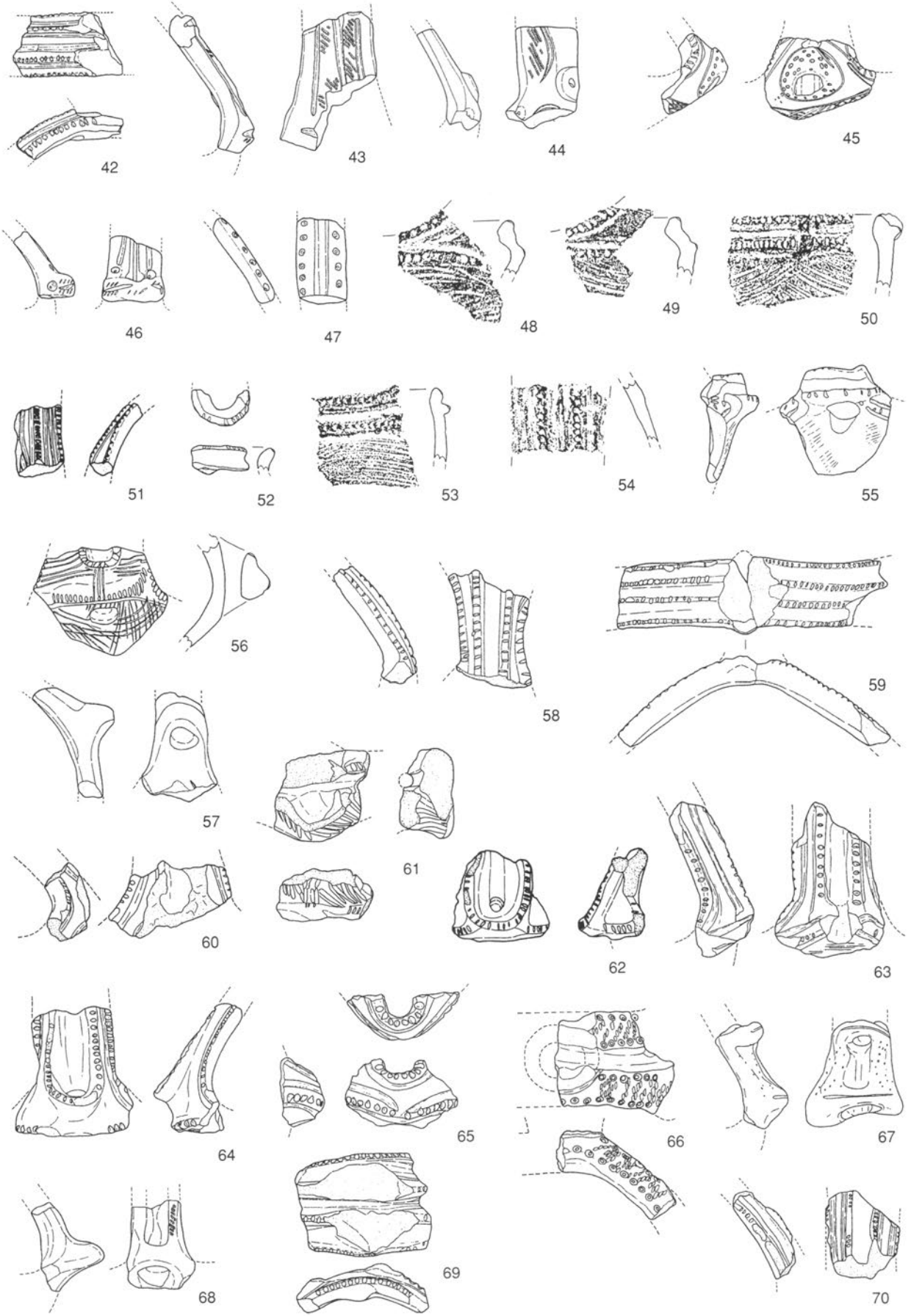
中期から後期の貝塚としてあまりにも有名な貝塚であり、1929年に大山史前学研究所を中心とする発掘が実施された際に人面付釣手土器が出土している。人面は下ぶくれで、眉と鼻が連続したT字状の隆帯で表現されており、後期の人面表現には通例見られるタイプである。高台を伴う鉢部は大きく開いて屈曲し、やや内傾ぎみに立ち上がり無文帯となっている。人面の両脇には耳が貼り付けられ、その背後に紐を通す把手が伴っている。頂部は欠損しており、ここにはお猪口状の装飾が付いていたものと考えられる。時期



第1図 釣手土器 (1~22 能満上小)



第2図 釣手土器 (23~41 祇園原)

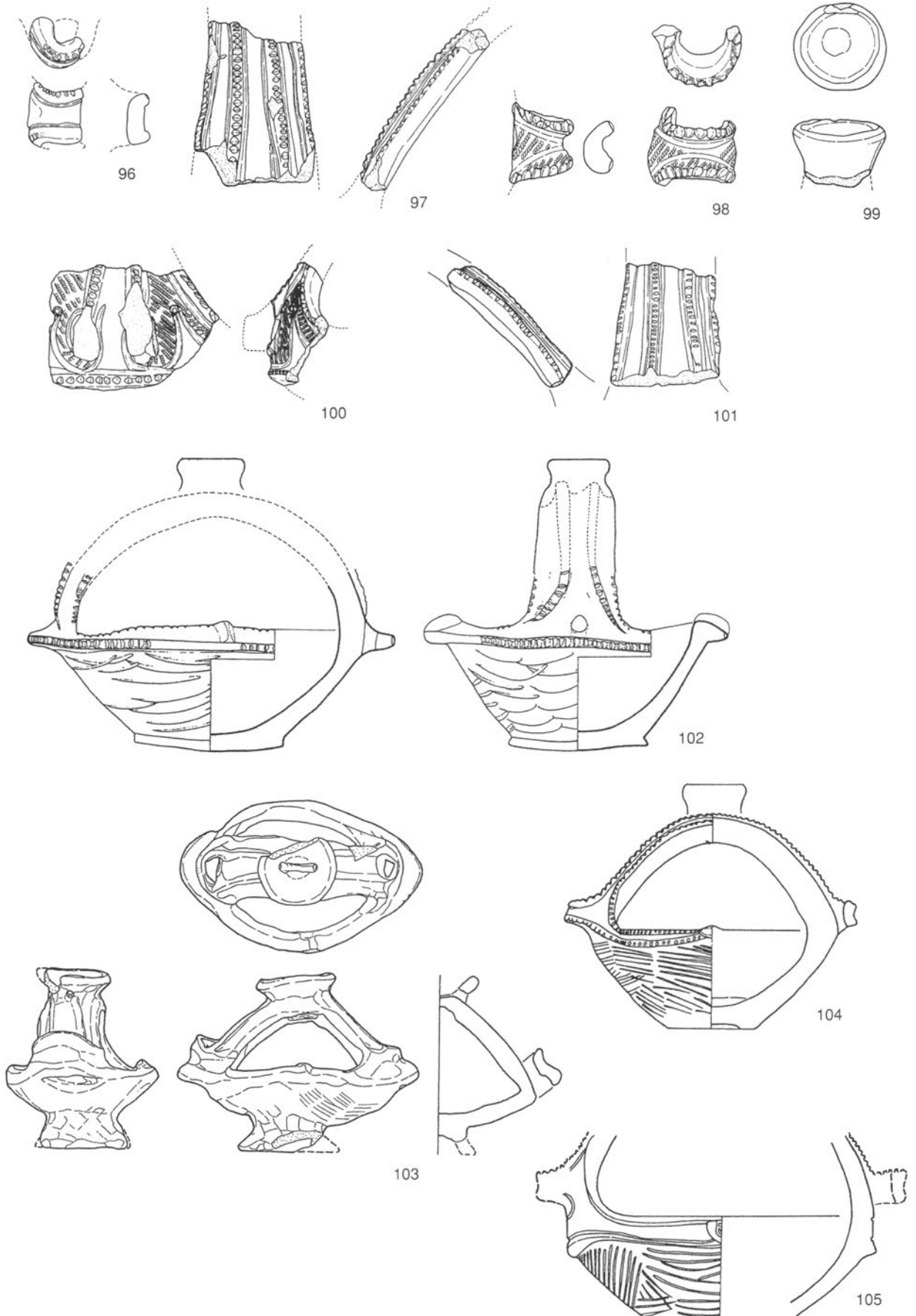


第3図 釣手土器 (42~70 祇園原)

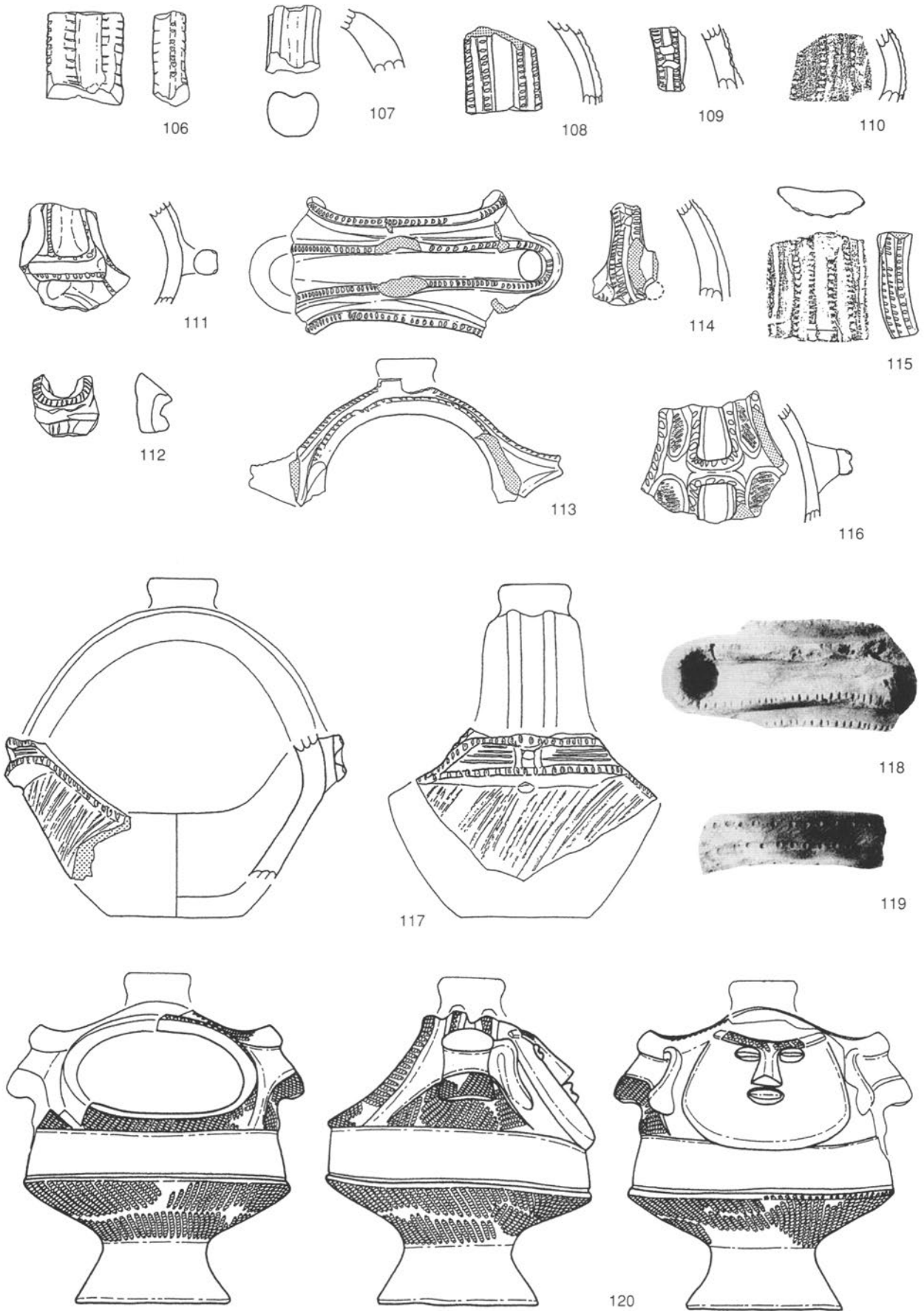


第4図 釣手土器 (71~95 祇園原)

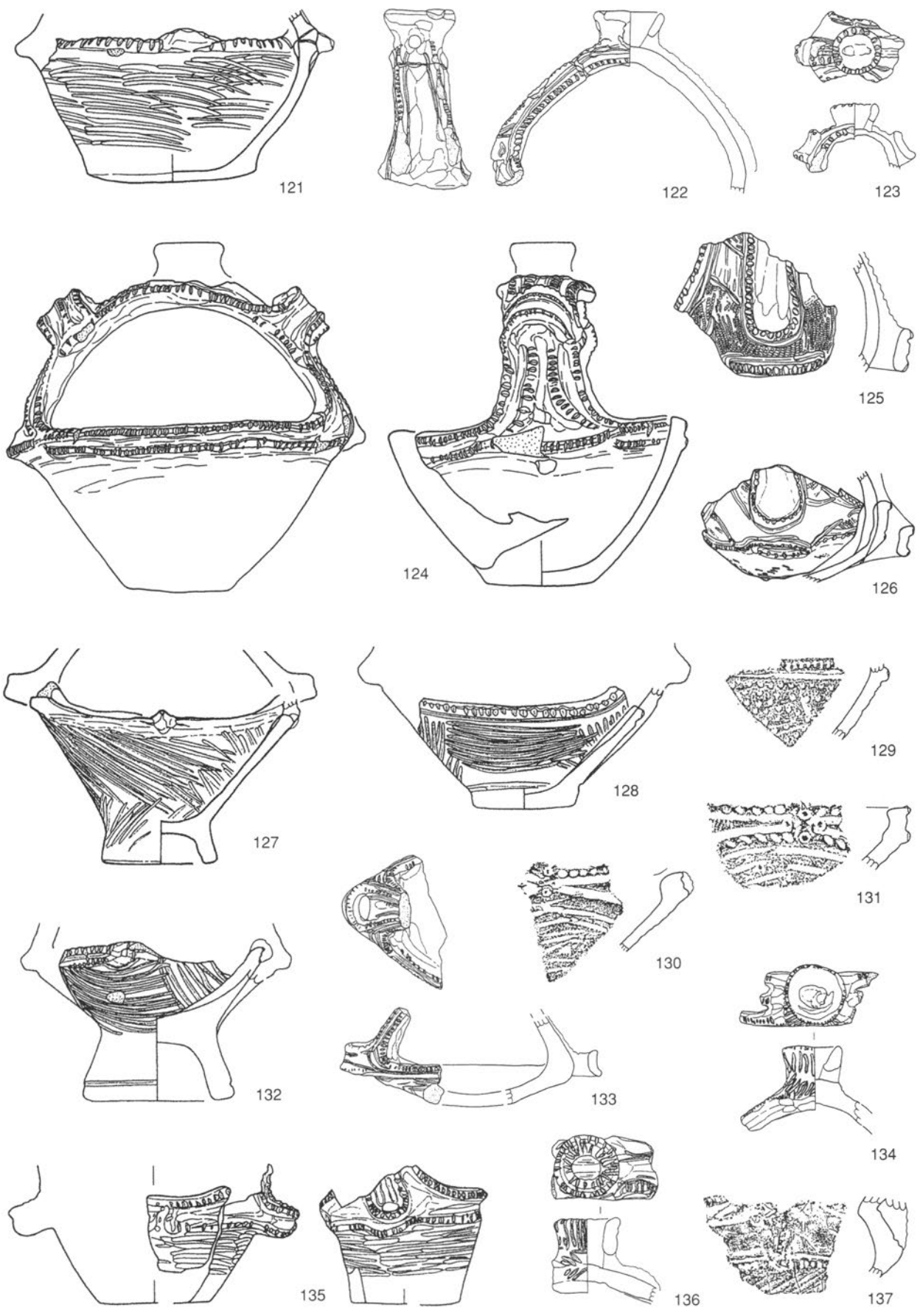




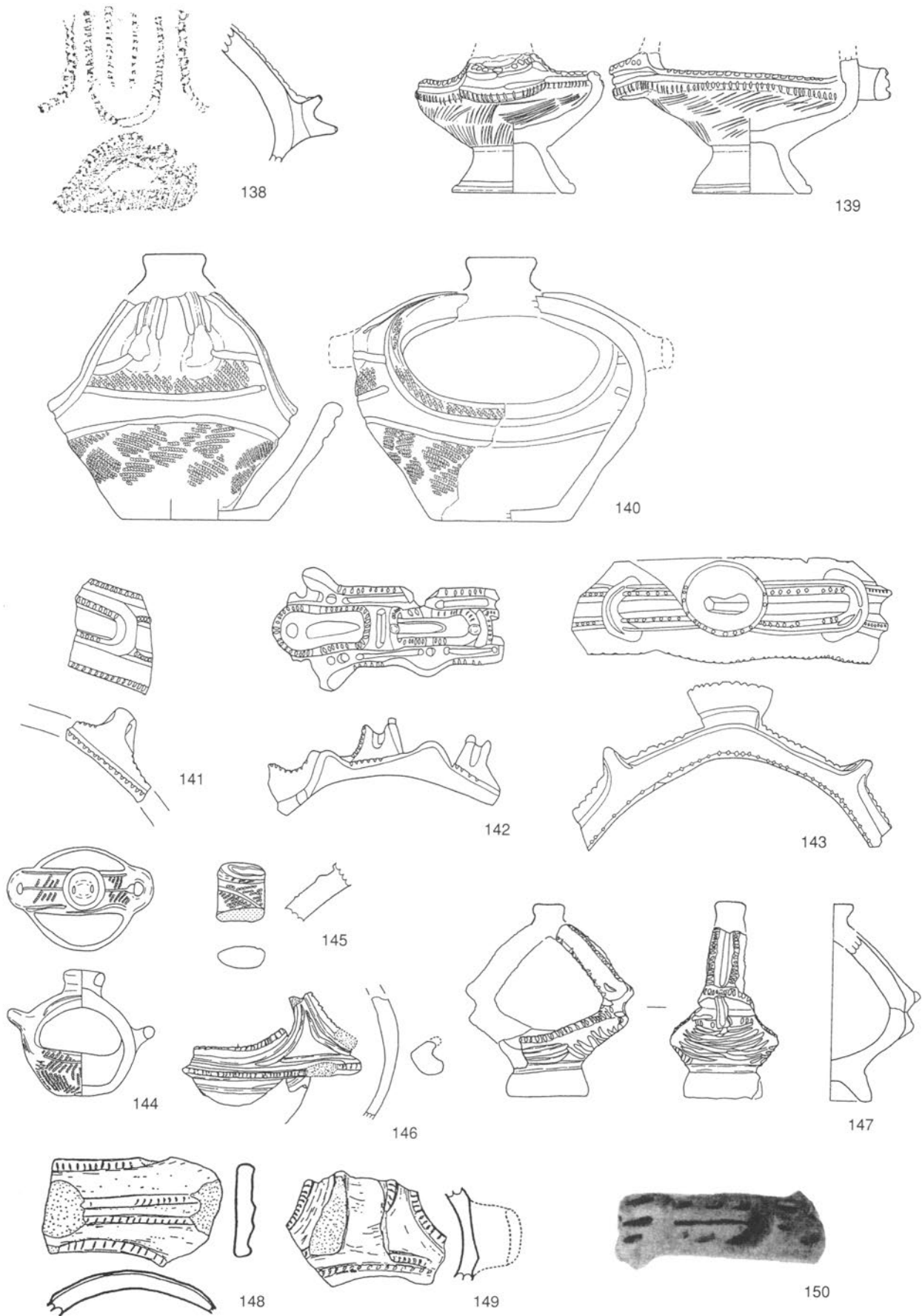
第5図 釣手土器 (96~101 祇園原, 102 西広, 103 鹿島台, 104・105 千代田)



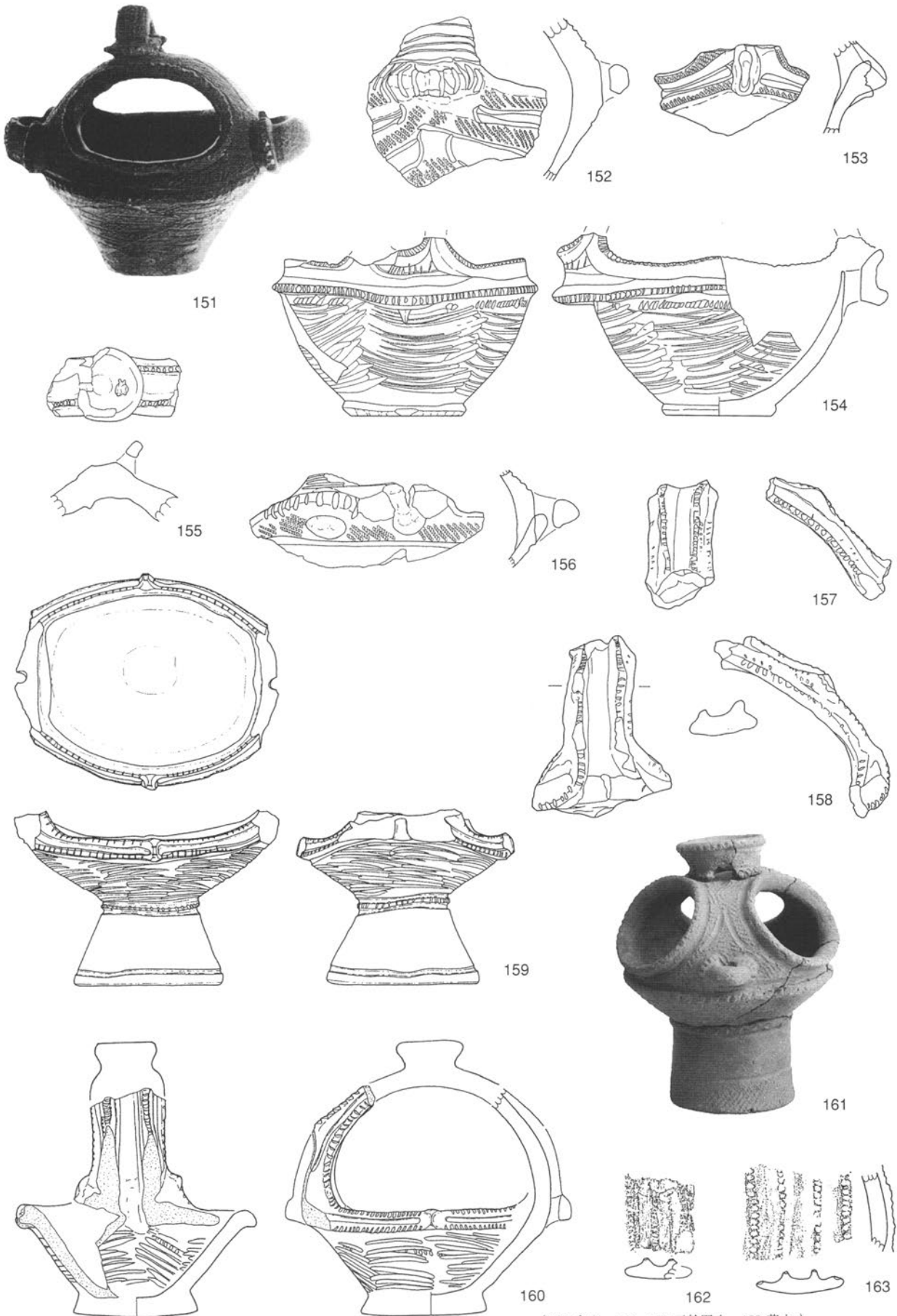
第6図 釣手土器 (106~117 内野第1, 118・119 中沢, 120 良文)



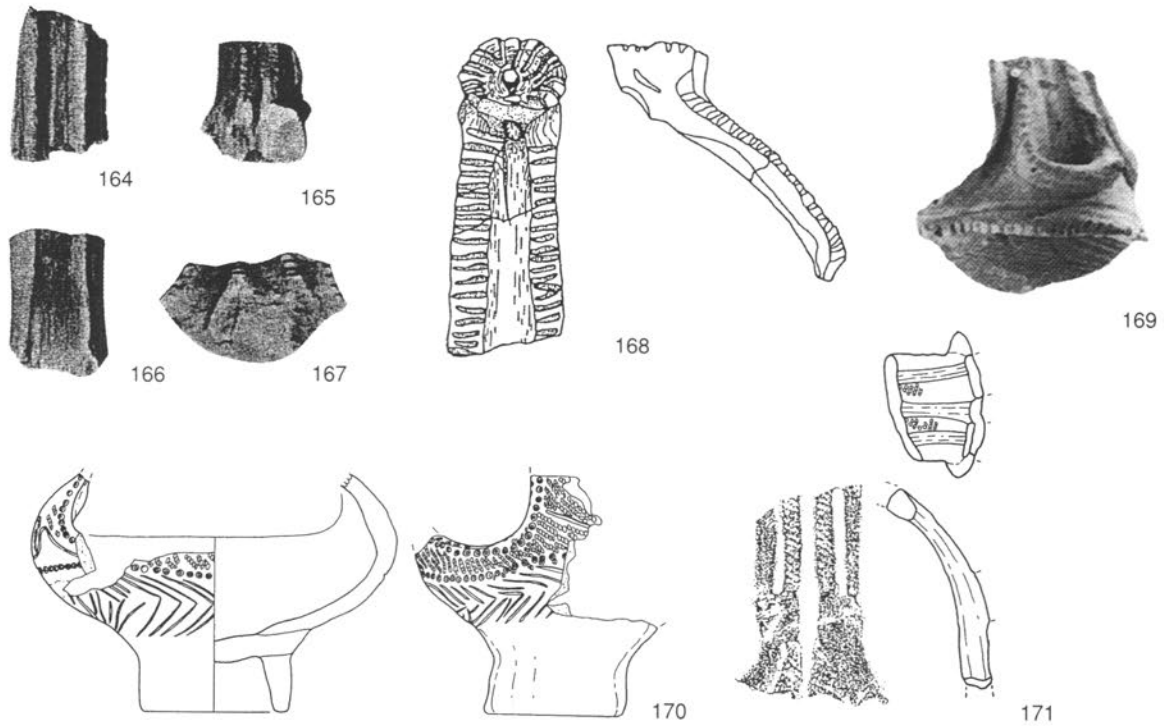
第7図 釣手土器 (121~137 吉見台)



第8図 釣手土器 (138 吉見台, 139・140 下太田, 141~143 小菅法華塚, 144・145 堀之内, 146・147 宮内井戸作, 148・149 貝の花, 150 古作)



第9図 釣手土器 (151 余山, 152~158 三輪野山, 159 芝山, 160 下ヶ戸宮前, 161~163 井野長割)



第10図 釣手土器 (164~167 八祖, 168 寺向, 169 神楽場, 170 中山新田 I, 171 本郷台)

は、縄文が随所に施文され、幅広の無文帯を伴うことから加曾利B2式と考えられる。

#### 佐倉市吉見台遺跡 (第7・8図 121~138)

本格的な発掘調査が1972年~1973年と1983年, 1993年~1995年に実施されている。1972年~1973年の調査については概報のみのため詳細は不明である<sup>(6)</sup>。1983年, 1993年~1995の調査については報告書が刊行されている<sup>(7)</sup>。それらによれば中期から晩期にかけての竪穴住居跡が9棟, 土坑124基などが検出されている。釣手土器は, 18例出土しており, 完形に近い例が出土している。残念ながら竪穴住居跡などの遺構内から出土しているものはない。底部に高台が付くものと付かないものがあるほか, 鉢部が浅い船底形を呈する例も1例ある。最も遺存が良かったのは第7図124である。鉢部は無文で, 釣手付け根の把手の他に釣手中段にも紐を通すための把手が付けられている。頂部は欠損しておりお猪口状の装飾が付いていたと考えられる。施文はいたってシンプルで貼付隆帯に施されたキザミのみである。時期は加曾利B3式~安行1式であろう。126・137は縄文施文であり加曾利B2式~加曾利B3式であろう。その他の釣手土器は鉢部の弧線文や斜線文などから曾谷式~安行1式あたりであろう。その他の特殊な遺物としては, 土偶, 土版, 耳飾, 異形台付土器, 手燭形土製品, 独鈷石, 石棒などが豊富に出土している。

#### 茂原市下太田貝塚 (第8図 139・140)

縄文時代中期から後期にかけての土壌墓を主体とする遺跡である。低湿地のため人骨300体以上が検出されている。釣手土器は, 加曾利B2式~安行1式を主体とする第3層から2例出土しており, 比較的遺存状態がよく全体形を知ることができる。2点には高台の有無の違いがあり, 施された文様にも違いがある。140は口縁部に沿って無文帯があり, 縄文が釣手側縁にも施されている。釣手は幅が広く釣手付け根部分に耳が付けられ, シンプルな2条の突帯が紐ずれないように貼り付けられている。頂部は欠損しているがお猪口状の飾りが付くのであろう。139は足高の高台に小さめの鉢が伴う。口縁に2段の突帯が巡

り細かいキザミが施され、浅鉢外面には浅い集合沈線が雑に施されている。時期的には140の方が古く加曾利B2式～B3式と思われ、139は加曾利B3式～曾谷式の時期であろう。その他の特殊な遺物としては、土偶、土版、手燭形土製品などが出土している。

以上、おもな遺跡について見てきた。釣手土器を出土した30遺跡の内14遺跡が貝塚で、その他の遺跡も成田市小菅法華塚Ⅱ遺跡や八千代市芝山遺跡などの小規模な集落遺跡を除けば、拠点的な集落遺跡から出土している例が目立つ。83例の釣手土器が出土した市原市祇園原貝塚は、近隣の西広貝塚の出土点数<sup>(8)</sup>に比しても圧倒的な出土数である。隣接する同時期の貝塚でありながら出土点数に大きな差がある事は、この地域における拠点集落が皆同じ様な性格をもって機能していたわけではなく、拠点集落それぞれに個性があって釣手土器を多量に消費するような儀礼が盛んに行われた集落が存在していたことが想定される。

### 3. 形態

千葉県内出土例で最も多いのが第Ⅱ種である。今回確認した総数225例の釣手土器の約98%を占めている。この他の形態は出土例が少なく、第Ⅲ種では佐倉市井野長割遺跡の1例、同市遠部台貝塚の2例の合計3例、第Ⅳ種では市原市祇園原貝塚から1例出土しているにすぎない。

千葉県内の第Ⅱ種の基本形態は、浅鉢に幅の広い板状の釣手を伴う例が多いが、棒状を呈する釣手の例も少なくない。懸垂用の紐を頂部に導くための突帯が釣手に貼り付けられる例が一般的である。市原市能満上小貝塚の15・16や祇園原貝塚の34・43・44・46・47・81・82・83・85・88・93などのようにこの突帯が伴っていない例もある程度出土している。紐を通す把手は、釣手と浅鉢との接続部2か所に1個ずつ付けられている。埼玉県桶川市高井東遺跡例のように釣手中段にも紐通しの把手が付く例は、今のところ祇園原貝塚の24・67、吉見台遺跡の123・124などに限られている。釣手頂部にはお猪口状の装飾が付けられるのが通例であり、付かない例も僅かだが認められる<sup>(9)</sup>。このお猪口状の装飾には左右に小孔があり、釣手に沿って頂部まで導いた紐をこの小孔を通して頂部で結束し、中央で釣り下げるように工夫されたものである。鉢部には高台が付く例と付かない例がある。今のところ出土例では高台が現れる時期は明確ではないが、加曾利B2式の出現段階で既に2者が存在する。高台の有無が機能面で違いを持つとは思わないことから、製作者の嗜好により採用されているに過ぎないと思われる。出土例は少ないが中期の釣手土器においても山梨県長坂町酒呑場遺跡41号住居跡<sup>(10)</sup>や同県大月市塩瀬下原遺跡<sup>(11)</sup>などから高台を伴う例が出土しており、高台は後期の釣手土器から現れる新しい要素ではない。

第Ⅲ種は、井野長割遺跡の161のほか古くは佐倉市遠部台貝塚から2例出土しているようである<sup>(12)</sup>。写真で掲載されている遠部台貝塚の1例は、井野長割遺跡例に近似している。高台の有無についてはよくわからない。三方から均等に釣手が配され中央で結束する類例は、県外では茨城県の福田貝塚<sup>(13)</sup>で見られる程度で、全国的に見ても少ない。福田貝塚ではこの他にももう1例第Ⅲ種が出土しているが<sup>(14)</sup>、釣手が棒状を呈しており趣が若干異なっている。全国的には第Ⅲ種に分類される例が青森県西津軽郡木造町亀ヶ岡遺跡<sup>(15)</sup>などからも出土しているものの、井野長割遺跡例のような三方から釣手が均等にのびる形態ではない。今のところ井野長割遺跡例のような釣手部の形態は、利根川中流域を挟む千葉・茨城の小地域

に限られようである。井野長割遺跡例に見られる高台は、ほぼ垂直に立ち上がる足高の高台で、異形台付土器の高台とまったく変わらないものである。紐を通す把手は耳状に半円形を呈し、第Ⅱ種のそれとは異なっている。祇園原貝塚の31もあるいはこの種の釣手土器の一部かもしれない。頂部のお猪口状の装飾は、第Ⅱ種と同様に紐を中央で結束する役目を果たしている。

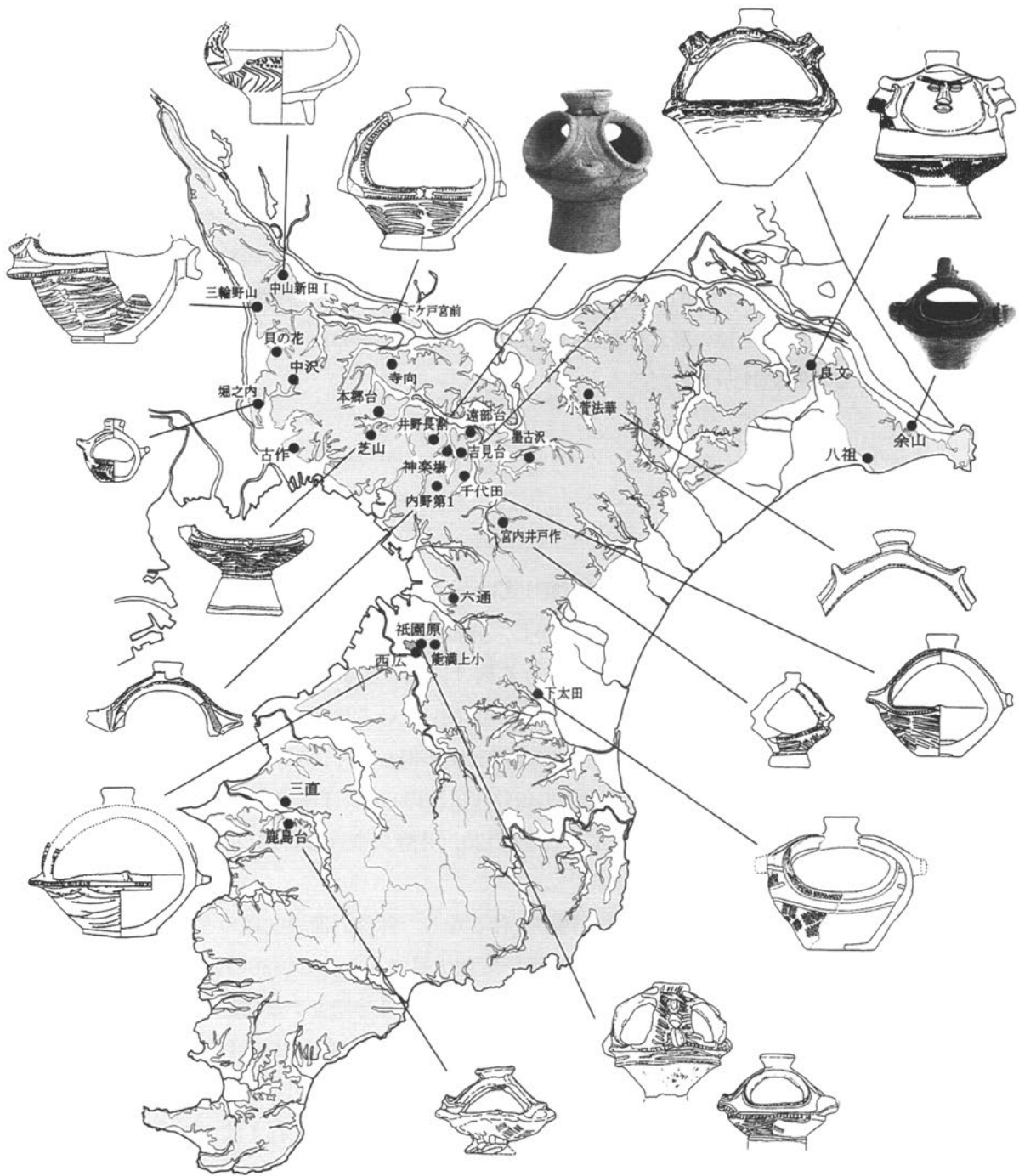
第Ⅳ種は、祇園原貝塚の23のみである。全国的に見ると同じ第Ⅳ種としたものの中には、埼玉県高井東遺跡の2例<sup>(16)</sup>や東京都大田区大森貝塚例<sup>(17)</sup>など埼玉県東部を中心とする地域性の濃い形態もあり、祇園原貝塚の23はそれらの形態とは明らかに異なっている。23は釣手が板状を呈し、紐を通す耳を伴っていない。また、紐を導く突帯も釣手に貼付けられていない。その代わりに4本の釣手に紐受けとなる凹みを施した突起が上下に2個ずつ貼り付けられている。また、頂部のお猪口状の装飾は、四方から導かれた紐を結束する機能を果たすための小孔がなく天井が貫通している。浅鉢には高台が伴い、口縁部には2条の突帯が巡る。竪穴住居跡の時期から安行1式と考えられ、他に類例がない。加曾利B式期の釣手土器とはかなり趣を異にしている。祇園原貝塚の他に第Ⅳ種の可能性がありそうな例がないわけではない。能満上小貝塚の15・16や祇園原貝塚の24・43・44・46・47・57・67などには第Ⅳ種の可能性もある。これらには通常見られる紐ずれを防止するための突帯がなく、沈線によってその機能を代替している。これは埼玉県高井東遺跡例の釣手部に見られる沈線と同様のものである。高井東遺跡例のような第Ⅳ種の完形品が千葉県内でも出土しないかぎり釣手部の破片だけでは判断しにくい。

以上が房総半島に見られる釣手土器の形態である。房総半島の典型的な形態は第Ⅱ種であり、代表的な例としては、高台が付くものでは36の祇園原貝塚例、高台が付かないものでは124の吉見台遺跡例が挙げられるだろう。なお、前回の集成で第Ⅲ種とした人面装飾を伴う良文貝塚例は、第Ⅱ種の片面を人面装飾によって完全に塞いでいる特殊な例である。岩手県九戸郡軽米町長倉I遺跡<sup>(18)</sup>からも人面を伴う釣手土器が出土しているが、顔の目口鼻を透かしによって表現している点が異なっている。良文貝塚例を前稿では第Ⅲ種としたが、構造としては第Ⅱ種の片方の窓を人面で加飾したタイプと考えた方がよいかもしれない。

#### 4. 分布

第11図に千葉県内の出土分布図を示した。房総南部の安房・夷隅地域は今のところ出土例はないが、ほぼ房総の全域に出土例が見られる。分布の中心は市原市以北の印旛沼周辺から千葉県北西部にかけてで、関東地方全体でも埼玉県東部から茨城県南西部を合わせた地域が、後期釣手土器の分布の中心地域となっている。同時期に存在する異形台付土器の分布の中心も釣手土器の分布の中心地域とほぼ重なっており興味深い<sup>(19)</sup>。東京湾沿岸部のほか、印旛沼周辺、利根川下流域の貝塚を伴う拠点集落からの出土例が多く見られるほか、印旛沼南部の千代田遺跡や宮内井戸作遺跡などの内陸の拠点集落でも出土例が見られる。一方、時期差による分布の変化については曾谷式以降の類例が少ないことからその変化を明らかにすることは難しい。形態別の分布は、第Ⅱ種が房総半島のほぼ全域から出土し、第Ⅲ種は印旛沼以北の一部地域に限られるようだ。第Ⅳ種については、個体数が少なく客体的なあり方であり、埼玉県東部をその中心としているようである。





第11図 釣手土器の分布

## 5. 出土状況

釣手土器はどのような遺構から出土しているのだろうか。最も多いのが堅穴住居跡からの例で、19棟から42例が出土している。このうち祇園原貝塚50号住居跡からは17例もの釣手土器が出土しており、これ

をのぞけば1棟の竪穴住居跡から1～3例程度の出土が普通である。また、千代田遺跡では小竪穴から出土している例が2例あるほか、祇園原貝塚や能満上小貝塚では土坑から出土している例があるが、竪穴住居跡以外の遺構からは僅かな出土である。その他は遺構に伴わない包含層乃至は時期の異なる遺構の覆土に混入したもので、全体の76%にあたる。特殊な出土状況が報告されている例はなく、一般の土器の出土状況との違いを見出すことは難しい。個体の遺存状態は、破片で出土する例が主体で、中期の釣手土器に見られるような完形に近い状態の出土例は良文貝塚など僅かである。すでにふれたように竪穴住居跡のほとんどで多型式にわたる土器の混入があり、出土した釣手土器がその竪穴住居跡に伴うものかどうかを判断するのが難しい事例が多い。祇園原貝塚50号住居跡から17点の釣手土器が出土しているのは、同一個体が含まれていたとしても、1棟の竪穴住居跡に廃棄された釣手土器の出土点数としては特異な状況であり、意図的な廃棄による可能性があるだろう。

## 6. 時期

千葉県内では、今のところ称名寺式から加曽利B1式にかけての時期には出土例がなく、加曽利B2式になってから釣手土器が出現すると考えられる。しかし、詳細に見れば竪穴住居跡などの出土例の中で、遺構の一括資料によって確実な加曽利B2式と判断できる例はほとんどない。その理由は、加曽利B2式以降の竪穴住居跡には、後期後半の多時期にわたる土器が混在している場合がほとんどであることや、大型住居跡などにおいては、さらに晩期に至る土器などが混在する例も多く、竪穴住居跡の時期を決定することが難しいことなどによっている。内野第1遺跡J-49号住居跡の110・111や祇園原貝塚50号住居跡の36などのほか、単独の出土だが余山貝塚の151や良文貝塚の120、井野長割遺跡の161などは加曽利B2式乃至はB3式の古い段階の様相を呈すると考えられる。

文様では沈線で区画した中に縄文を充填する例が主体となる。鉢部外面の文様のうち最も多いのは、祇園原貝塚50号住居跡の36に見られる弧線文などの浅い集合沈線である。この36の釣手土器は加曽利B3式～安行1式にかけての時期と考えられ、鉢部に施文される弧線文は時期を下るに従い次第に雑な施文となるようである。千葉県内出土例は、この加曽利B3式～安行1式までの時期に属するものが最も多いと考えられる。祇園原貝塚の23は、安行1式の竪穴住居跡から出土している。形態が第IV種であるとともに文様の点で他の釣手土器と様相が異なる。また三輪野山貝塚の152の破片は安行1式と思われ、鉢部外面には深鉢に見られる帯縄文が施されている。釣手部の文様は、横位の沈線のみで通常見られる紐を導く突帯を伴っていない。このような安行1式～2式と考えられる文様を伴う例は少ない。

県内出土例のピークは、加曽利B3式～曾谷式の時期にあたり、安行1式以降急速に製作されなくなり安行3a式期を迎える頃には完全に姿を消すのではないかとと思われる<sup>(20)</sup>。安行2式と考えられる千葉県内の出土例は今のところ見あたらないが、茨城県立木貝塚からは明らかな安行2式の出土例があり、千葉県でも今後この時期までは出土例が見られるようにはなると思われる。

## 7. まとめ

以上房総半島における後期釣手土器の様相についてみてきた。すでに述べたように、房総半島では中期の釣手土器の出土例は今のところ皆無である。また、後期前葉の称名寺式から堀之内式にかけての時期においても出土例はなく加曾利B式期になってから漸くその姿を見るようになる。現時点では、栃木県萩ノ平遺跡<sup>(21)</sup>や山梨県上ノ原遺跡<sup>(22)</sup>、茨城県冬木A貝塚<sup>(23)</sup>などの遺跡で、称名寺式から加曾利B1式にかけての遺構から釣手土器とみられる個体が散見されるが、この時期の資料は断片的で地域的なまとまりもないことから、中期後葉から後期前葉にかけての時期における釣手土器の系譜をたどることは今のところ難しい。

千葉県においては、後期の釣手土器の代表的な個体として知られている埼玉県高井東遺跡例や東京都大森貝塚例などに併行する加曾利B2式段階から出現する。出現期の釣手土器の分布は、市原市域から千葉県の北西部地域において出土例が集中し、埼玉県東部から茨城県西部にわたる地域を含めた範囲が、後期釣手土器の発生の中心地と考えられる。この範囲は中期の釣手土器を受容しなかった地域であり、その後の分布も中期の釣手土器の分布域でない地域が後期釣手土器の分布域となる点は非常に興味深い。出現初期の釣手土器の文様は、埼玉県高井東遺跡2例の釣手土器の文様と井野長割遺跡例のそれとは、同時期と考えられるものの類似性には乏しく、大宮台地の加曾利B2式と下総台地のそれとの地域的な土器文様の違いを反映している可能性が高い。最も出土例が多い時期は、加曾利B3式～曾谷式にかけての時期と考えられる。この間の釣手土器の形態や文様は余り変化がなく、形態的に類似した釣手土器が数多く製作されている。釣手土器の鉢部外面に施された弧線文あるいは斜線文などの集合沈線文は、加曾利B3式～安行1式の粗製深鉢や鉢形土器などの胴部下半に見られるもので、時期を経るに従って釣手土器においても雑な表現になっていくようである。

器種については千葉県にあっては、第Ⅱ種、第Ⅲ種、第Ⅳ種が混在している。第Ⅱ種が最も多く、第Ⅲ種や第Ⅳ種は、形態を知り得る個体は数少ないが、一覧表で第Ⅱ種としている破片資料の中に第Ⅲ種や第Ⅳ種の可能性がある例が含まれており、今後個体数が増えてゆくであろう。形態の違いが時期差を示している訳ではなく、製作者の嗜好により釣手部の形態が選択されているらしい。このあり方は中期の釣手土器においても言えることで、形態の違いによる分布圏が認められるものの、それぞれの分布圏が重なり合っており、1つの遺跡において複数の器種が採用されている。前稿でも指摘したように、関東に限れば、千葉・茨城は第Ⅱ種を主体とするエリア、埼玉・東京の東部・栃木南部に第Ⅳ種を主体とするエリア、利根川中流域を挟む千葉・茨城にまたがる小地域が第Ⅲ種を出土するエリアとなっており、加曾利B式系釣手土器の中に形態の違いによってある程度の地域圏を認めることができる。

釣手土器と同様に加曾利B2式期に出現するものに異形台付土器がある。ほとんどの遺跡で釣手土器とともに異形台付土器が出土しており、両者の出現は全く無関係ではなく、むしろ強い関連性を持つと思われる。釣手土器を介した中期以来の儀礼が縄文後期集落に採用され、その初期段階に異形台付土器の発生をみたと考えられ、釣手土器と共に新たな儀礼の道具として多くの集落で急速に採用されるようになっていったと考えられる。山内清男氏は、異形台付土器が加曾利B式土器の体部に孔のある台付壺形土器から転化したものであるとしており<sup>(24)</sup>、異形台付土器の生成と推移を明らかにした堀越正行氏も山内清男氏

の考えを支持している<sup>(25)</sup>。また、堀越氏は別稿で「異形台付土器・吊手土器・香炉形土器・柄香炉形土器製品・中空双脚付香炉形土器は、香炉のように煙を燻らす土器として使用され、使い分けされていたと考えられる」としており、類似した機能を推定している<sup>(26)</sup>。堀越氏が取り上げたこれらの器種の中で、その系譜が最も古いのが「吊手土器」や「香炉形土器」とも呼ばれるいわゆる釣手土器である。

はたして異形台付土器は、体部に孔のある台付壺形土器から転化したものなのだろうか。また、台付壺形土器から転化し、釣手土器と類似した機能を付与されるに至るのだろうか。異形台付土器の形態は、上から王冠状の口縁部、そろばん玉状の胴部、足高の高台部の3つの部分からなっており、基本的な構造は第Ⅱ種とした二窓構造の釣手土器の高台を伴う例とほぼ同じ構造と考えられる。確かに異形台付土器の胴部に付けられる一对の注口状突起は、釣手土器の釣手部の形態とは大きく異なるように思われる。しかし、第Ⅱ種の釣手土器の二つの窓が極端に矮小化され、異形台付土器の注口状突起に変容したと考える方が、全体の構造も含め異形台付土器発生の経緯を説明しやすいのではないか。加曽利B2式期に釣手土器が受容されてゆく中でごく早い時期に形態的な分化を果たし、新たな儀礼を担う道具として釣手土器とともに普及していったのではなかろうか。

この2者における機能面での大きな違いは、釣手土器が中期以来「釣り下げられる構造」であることに対し、異形台付土器が「据え置かれる構造」であることで、機能は類似していたとしてもそれまで釣手土器が担っていた儀礼の一部を分化させ新たな担い手として登場することになったのであろう。

加曽利B2式以降急速な普及を見せた釣手土器は、その後東北へと波及し、瘤付土器系釣手土器に変容しながら晩期へと継続する。東北においても釣手土器と共に異形台付土器の報告例が増えてきており、例えば岩手県九戸郡軽米町長倉Ⅰ遺跡<sup>(27)</sup>では多数の釣手土器と共に異形台付土器と考えられる個体が含まれていることなどから、東北北部まで波及していることは確実である。おそらく、関東において発生した異形台付土器は、釣手土器とともに一連の儀礼に必要な道具としてセット化し、東北へ波及してもその関係を保持し続けたのであろう。釣手土器と異形台付土器との関係については、機会を改めて検討することにした。

今後の課題は、釣手土器が房総半島において多量に製作された社会背景についての検討であろう。加曽利B式期の集落構造の変化が、中期末以降陰を潜めていた釣手土器の新たな発生を促したと考えられ、特に加曽利B1式～B2式の間の変化を遺構・遺物の両面から注意深く検証し、発生の契機を探る必要がある。確かに拠点集落からの出土例が多いという点は目についたが、小規模な集落からの出土例もあって、集落の大小を問わず保有されていることは明らかである。釣手土器が出土していない後期遺跡も多いが、集落全域を調査した例が少ないことから、千葉県内のほとんどの後期集落に定量的に保有されていた可能性は十分に想定できるだろう。一般の土器に比べれば確かに個体数は少ないが、従来思われているように極めて珍しい土器であるという認識を改める必要があり、後期後半の一時期ではあるが、千葉県内の後期集落に欠かすことのできない土器であったと推測される。今回の集成で確認された千葉県内の釣手土器の個体数は、中期の釣手土器で最も出土例が多い長野県のそれを上回っており、千葉県が後期の釣手土器のメッカであると言っても過言ではなかろう<sup>(28)</sup>。

本稿をまとめるにあたり、文献や実測図の収集のほか貴重なご教示を頂きました石田守一、安井健一、横山仁、大内千年、今泉潔、田中英世、高橋誠、高谷英一、田中大介、宮内潤子、平野雅一の各氏には心より感謝申し上げます。

## 註

- (1) 宮城孝之 1983「縄文時代中期の釣手土器」『中部高地の考古学Ⅱ』
- (2) 綿田弘実 1999「長野県富士見町札沢遺跡出土の釣手土器」『長野県立歴史館研究紀要』第5号  
綿田弘実 2001「東信濃からの視点」『山梨県考古学協会誌』12号  
綿田弘実 2002「縄文中期の釣手土器」『土器から探る縄文社会』2002年研究集会資料集 山梨県考古学協会  
新津 健 1999「縄文時代中期釣手土器考－山梨県内出土例からみた分類と使用痕－」『山梨県史研究』第7号  
新津 健 2002「縄文中期釣手土器考②」『研究紀要』18 山梨県埋蔵文化財センター  
綿田 (2002) によれば、中期の釣手土器の出土例は、全国で285例あまりに達している。
- (3) 蜂屋孝之 2004「縄文時代後期の釣手土器」『先史考古学研究』第9号
- (4) 註(3)に同じ。
- (5) 前稿(蜂屋 2004)の集成では、17遺跡にとどまっていた。今回掲げた出土点数については、現在整理中のもので出土点数が判明しているものは総数に含めたが、数が確定していない遺跡については総数には含めなかった。整理作業途中のものを含めると千葉県だけで230例を越えていると思われ、全国では前稿の集成後に出土例を知ったものを含めると350例余りに達しており、中期の出土例をかなり上回っている。
- (6) 近森 正ほか 1982「佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅰ」佐倉市遺跡調査会  
近森 正ほか 1983「佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ」佐倉市遺跡調査会
- (7) 林田利之 1997「吉見台遺跡B地点」財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第128集  
林田利之 1999「吉見台遺跡A地点」財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第159集
- (8) 現在西広貝塚の中心部分が整理中である。一覧表に掲げたように確認されている釣手土器の点数は13点余りであり、今までに報告されている釣手土器の数を総合しても祇園原貝塚との出土点数の差は極めて大きい。
- (9) 酒々井町墨古沢遺跡出土の1例には、釣手頂部のお猪口状の装飾が付いていない。小型品で、釣手の頂部に近い部分に紐を通すための把手が左右に付けられている。横山 仁氏から教示。
- (10) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第135集 1977年「酒呑場遺跡」
- (11) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第185集 2000年「塩瀬下原遺跡」
- (12) 池上啓介「千葉県印旛郡臼井町遠部石器時代遺跡の遺物」『史前学雑誌』第9巻第3号に2例出土していることが記されている。1例は記述のみであるが、三方から均等に釣手が配され中央で結束するもう1つの形態とほぼ同じタイプと思われる。
- (13) 『縄文土器大成3 後期』講談社 P89-258 (杉山寿栄男編『日本原始工芸』1928年の第144図版掲載のこの釣手土器を見ると頂部が欠損しており、現在は耳状の把手が復元されている。この器種の類例では頂部にお猪口状の装飾が付く例が見られることから、復元の誤りであろう。
- (14) 『平成12年度秋季展 縄文美術』財団法人辰馬考古資料館 2000年 資料番号4
- (15) 『平成12年度秋季展 縄文美術』財団法人辰馬考古資料館 2000年 資料番号27
- (16) 市川 修ほか 1974「高井東遺跡調査報告書」埼玉県遺跡調査報告書第25集
- (17) Morse, E.S 1879 SEIL MOUNDS OF OMORI Memoirs of Science Department, University of Tokio Japan Volume I Part I
- (18) 星 雅之ほか「長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第336集
- (19) 堀越正行「異形台付土器と土偶の背景」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(1)』勉誠社
- (20) 関東全域で安行2式末にはほぼ消滅し、晩期の安行3b式頃に東北から関東の釣手土器とは一線を画す新たな形態の香炉形土

器が逆輸入されると見られる。関東地方においては後期釣手土器の系譜は、晩期直前で消滅すると考えられる。前稿（蜂屋 2004）では、関東から東北へ波及した釣手土器が、いわゆる瘤付土器系釣手土器として成立し、その後晩期のいわゆる香炉形土器へと変容していくと考えている。

(21) 『萩ノ平遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第270集 2003年

(22) 『上ノ原遺跡』上ノ原遺跡発掘調査団 1999年

(23) 『冬木地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書-冬木A貝塚・冬木B貝塚-』財団法人茨城県教育財団

(24) 山内清男 1964「縄文式土器」『日本原始美術1』講談社

(25) 註(19)に同じ。

(26) 堀越正行 2004「柄香炉形土製品の提唱」『史館』第33号 史館同人

なお、内田儀久氏による異形台付土器に関する一連の論稿（内田儀久「異形台付土器論Ⅱ」『奈和15周年記念論文集』奈和同人 1984年、「異形台付土器用途考（上）」『奈和』第23号 1985年、「異形台付土器と台付吊手土器の相違」『印旛郡市文化財センター研究紀要1』1986年）にも言及すべき所だが紙数の関係で省略させていただく。

(27) 註(18)の報告書第287図 2126

(28) 綿田弘実(2001)によれば、長野県内の出土例は160点あまりであるという。

## 千葉県後期釣手土器一覧表註

- 1 忍澤成規 1995『市原市能満上小貝塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書第55集
- 2 忍澤成規ほか 1999『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告V
- 3 市毛 勲ほか 1977『西広貝塚-上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ-』上総国分寺台遺跡調査団編
- 4 財団法人市原市文化財センターが整理中である。
- 5 白井久美子・小林清隆 2002「縄文時代後期の大型住居と舟の線刻をもつ須恵器-鹿島台遺跡の調査概要と新資料の紹介-」『研究連絡誌』第63号 財団法人千葉県文化財センター
- 6 米内邦雄ほか 1972『千代田遺跡』四街道千代田遺跡調査会
- 7 田中英世ほか 2001『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』財団法人千葉市文化財調査協会
- 8 鎌ヶ谷市教育委員会 1992『平成3年度 鎌ヶ谷市内遺跡発掘調査概報』
- 9 大山 柏ほか 1929「千葉県良文村貝塚調査概報」『史前学雑誌』第1巻第5号（実測図は能城秀喜 1986年「千葉県香取郡小見川町良文貝塚出土の考古資料」『大正史学』第16号から転載した。）
- 10 林田利之 1995『吉見台遺跡A地点』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第159集
- 11 林田利之 1997『吉見台遺跡B地点』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第128集
- 12 菅谷通保 2003『下太田貝塚』財団法人東総文化財センター
- 13 鈴木圭一ほか 1995『小菅法華塚Ⅰ・Ⅱ遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第92集
- 14 市川考古博物館 1992『堀之内貝塚図譜』市川考古博物館研究調査報告第5集
- 15 喜多裕明 1998『宮内井戸作遺跡Ⅰ地区』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第136集
- 16 財団法人印旛郡市文化財センターにて整理中
- 17 八幡一郎ほか 1973『貝の花貝塚』松戸市文化財調査報告第4集 松戸市教育委員会
- 18 岡崎文喜ほか 1983『古作貝塚Ⅱ』船橋市遺跡調査会古作貝塚調査団
- 19 國學院大學考古学資料館 1986『余山貝塚資料図譜』

- 20 大内千年ほか 2002『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書』財団法人千葉県文化財センター
- 21 今泉 潔 2004『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書(2)』財団法人千葉県文化財センター
- 22 落合章雄 1989『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 23 石田守一 2000「下ヶ戸宮前遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1』千葉県
- 24 財団法人 印旛郡市文化財センターにて整理中(昭和50年調査分)
- 25 戸谷敦司ほか 2004『千葉県佐倉市井野長割遺跡(第4次調査)』財団法人印旛郡市文化財センター第205集
- 26 昭和50年調査分を財団法人 印旛郡市文化財センターが整理中である。
- 27 第8次調査分を財団法人 印旛郡市文化財センターが整理中で、さらに出土点数が増える可能性がある。
- 28 岡崎文喜ほか 1978『八祖遺跡』八祖遺跡調査団(遺物の説明がないため、写真から判断したものを掲げている。)
- 29 武部喜充ほか 1985『寺向・捕込附遺跡』白井聖地公園遺跡調査会
- 30 國學院大學 1989『考古学資料館要覧-小野良弘旧蔵資料-』
- 31 原田昌幸ほか 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』財団法人千葉県文化財センター
- 32 武藤健一ほか 2004『高津館跡b地点・本郷台遺跡』八千代市教育委員会
- 33 池上啓介 1937「千葉県印旛郡白井町遠部石器時代遺跡の遺物」『史前学雑誌』第9巻第3号
- 34 戸村正己 1983「千葉県高谷川遺跡発見の釣手土器」『足あと』
- 35 財団法人 千葉県文化財センターが整理中である。
- 36 財団法人 千葉県文化財センターが整理中である。
- 37 財団法人 千葉県文化財センターが整理中である。

No.	所在地	遺跡名	挿図番号	遺構	時期	遺存部位	形態	註
1	千葉県市原市能満	能満上小貝塚	第1図1	68号土坑	加曾利B2~B3	釣手部	II	1
			第1図2	3B-63	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図3	2C-48	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図4	3D-05	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図5	2C-57	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図6	3D-42	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図7	4B-81	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図8	4C-41	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図9	7C-76	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図10	7C-94	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図11	7C-68	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図12	7D-55・75	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図13	7D-24・34	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図14	7D-67	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図15	7D-54	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図16	7D-22	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図17	8D-95	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図18	7D-94	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図19	7D-41	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図20	7D-03	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図21	攪乱層	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第1図22	3E-94・95	加曾利B2~B3	釣手部	II	
2	千葉県市原市根田	祇園原貝塚	第2図23	41号住居跡	安行1	3 / 4	IV	2
			第2図24	42号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第2図25	42A・B号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第2図26	42A・B号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第2図27	43号住居跡	安行1	釣手部	II	
			第2図28	48号住居跡	安行1~安行2	鉢部	II	
			第2図29	49A号住居跡	曾谷~安行1	釣手部	II	
			第2図30	49A号住居跡	曾谷~安行1	鉢部	II	
			第2図31	49A号住居跡	曾谷~安行1	釣手部	II	
			第2図32	49B号住居跡	曾谷~安行1	釣手部	II	
			第2図33	49B号住居跡	曾谷~安行1	釣手部	II	
			第2図34	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第2図35	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第2図36	50号住居跡	加曾利B2~B3	3 / 4	II	
			第2図37	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第2図38	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第2図39	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第2図40	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第2図41	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図42	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図43	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図44	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図45	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図46	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図47	50号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図48	50号住居跡	加曾利B2~B3	鉢部	II	
			第3図49	50号住居跡	加曾利B2~B3	鉢部	II	
			第3図50	50号住居跡	加曾利B2~B3	鉢部	II	
			第3図51	55号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図52	301号土坑	曾谷~安行1	釣手部	II	
			第3図53	301号土坑	曾谷~安行1	鉢部	II	
			第3図54	301号土坑	曾谷~安行1	釣手部	II	
			第3図55	351号土坑	安行1	釣手部	II	
			第3図56	58号貝層	安行	釣手部	II	
			第3図57	(21号住居跡)	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図58	(10号住居跡)	加曾利B2~安行1	釣手部	II	
			第3図59	(10号住居跡)	加曾利B2~安行1	釣手部	II	
			第3図60	(13号住居跡)	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図61	(13号住居跡)	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図62	(13号住居跡)	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図63	B2-18	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図64	B2-30	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図65	B2-30	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図66	B2-38	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図67	B2-48	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			-	B2-61	?	破片	II	
			第3図68	B2-68	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図69	B2	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第3図70	C3-37	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図71	D3-12	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図72	D3-28	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図73	D3-44	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図74	D3-49	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図75	D3-65	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図76	D3-69	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図77	D3-89	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図78	D3-89	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図79	C3・D3	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			-	E3-03	?	破片	II	
			第4図80	E3-05	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図81	E3-14	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図82	E3-15	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図83	E3-15	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図84	E3-23	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図85	E3-26	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図86	E3-35	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図87	E3-35	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図88	E3-64	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図89	E3-64	加曾利B2~B3	釣手部	II	



No.	所在地	遺跡名	挿図番号	遺構	時期	遺存部位	形態	註
2	千葉県市原市根田	祇園原貝塚	第4図90	E3-64	加曾利B2~B3	釣手部	II	2
			-	E3-89	?	破片	II	
			第4図91	F3-23・24	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			-	不明	?	破片	II	
			第4図92	不明	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図93	RH-53	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図94	SI-30	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第4図95	SI-50	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第5図96	SI	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第5図97	TI-03	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第5図98	TI-47	加曾利B2~B3	釣手部	II	
第5図99	UI-53	加曾利B2~B3	釣手部	II				
第5図100	UI-54	加曾利B2~B3	釣手部	II				
第5図101	VJ-34	加曾利B2~B3	釣手部	II				
3	千葉県市原市西広	西広貝塚	第5図102	SM027ピット群	加曾利B3~曾谷	1/2	II	3
-	-	-	-	加曾利B2~安行1	ほぼ完形1・釣手部12	II	4	
4	千葉県君津市六手	鹿島台遺跡	第5図103	DSI-018住居	加曾利B2~B3	完形	II	5
5	千葉県四街道市物井	千代田遺跡	第5図104	5号小堅穴	曾谷~安行1	完形?	II	6
			第5図105	64号小堅穴	曾谷~安行2	1/2	II	
6	千葉県千葉市花見川区宇那谷町	内野第1遺跡	第6図106	J-16号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	7
			第6図107	J-16号住居跡	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第6図108	J-48号住居跡	加曾利B2~安行1	釣手部	II	
			第6図109	J-48号住居跡	加曾利B2~安行1	釣手部	II	
			第6図110	J-49号住居跡	加曾利B2	釣手部	II	
			第6図111	J-49号住居跡	加曾利B2	釣手部	II	
			第6図112	J-18号住居跡	加曾利B2	釣手部	II	
			第6図113	J-20号住居跡	加曾利B3~安行1	1/3	II	
			第6図114	21V-8c	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	
			第6図115	25U-14c・15a	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	
			第6図116	21V-8c	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	
			第6図117	J-76号住居跡	曾谷~安行1	1/2	II	
			第6図118	包含層	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	
			第6図119	包含層	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	
7	千葉県鎌ヶ谷市東中沢	中沢貝塚	第6図120	包含層	加曾利B2	3/4	II	8
8	千葉県香取郡小見川町貝塚	良文貝塚	第7図121	貝層	加曾利B3~安行1	1/2	II	9
9	千葉県佐倉市吉見	吉見台遺跡A地点	第7図122	B5-1d	加曾利B3~安行1	釣手部	II	10
			第7図123	B6-3c	加曾利B3~安行1	釣手部	II	
			第7図124	貝層	加曾利B3~安行1	ほぼ完形	II	
			第7図125	B5-2c	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第7図126	B5-4d	加曾利B3~安行1	鉢部	II	
			第7図127	B5-2c	加曾利B3~安行1	鉢部	II	
			第7図128	B5-4b	加曾利B3~安行1	鉢部	II	
			第7図129	B5-4c	加曾利B3~安行1	鉢部	II	
			第7図130	B6-2a	加曾利B3~安行1	鉢部	II	
			第7図131	B5-2c	加曾利B3~安行1	鉢部	II	
			第7図132	C7-1a, 1c	加曾利B3~安行1	鉢部	II	
			第7図133	B6-2d	加曾利B3~安行1	1/4	II	
			第7図134	B6-1d	加曾利B3~安行1	釣手部	II	
			第7図135	B5-4b	加曾利B3~安行1	鉢部	II	
		第7図136	B6-3c	加曾利B3~安行1	釣手部	II		
		第7図137	C7-2b	加曾利B2~B3	鉢部	II		
		第8図138	包含層	加曾利B3~安行1	釣手部	II		
		第8図139	包含層	加曾利B3~曾谷	1/2	II		
		10	千葉県茂原市下太田	下太田貝塚	第8図140	包含層	加曾利B2~B3	
11	千葉県成田市小菅	小菅法華塚II遺跡	第8図141	包含層	加曾利B2~B3	釣手部	II	13
			第8図142	包含層	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第8図143	包含層	加曾利B2~B3	釣手部	II	
12	千葉県市川市北国分町	堀之内貝塚	第8図144	-	加曾利B2~B3?	完形	II	14
			第8図145	-	加曾利B2~B3?	釣手部	II	
13	千葉県佐倉市宮内	宮内井戸作遺跡	第8図146	6号溝	加曾利B2~B3	釣手部	II	15
			第8図147	包含層	加曾利B2~B3	2/3	II	
			-	住居跡・土坑など	加曾利B2~曾谷	11点以上	II	
14	千葉県松戸市	貝の花貝塚	第8図148	包含層	加曾利B2~B3	釣手部	II	17
			第8図149	包含層	加曾利B2~B3	釣手部	II	
15	千葉県船橋市古作	古作貝塚	第8図150	包含層	加曾利B2~B3	釣手部	II	18
16	千葉県銚子市余山町	余山貝塚	第9図151	包含層	加曾利B2~B3	2/3	II	19
17	千葉県流山市三輪野山	三輪野山貝塚	第9図152	第2号住居跡	曾谷~安行2	釣手部	II	20
			第9図153	14K44	曾谷~安行1	鉢部	II	
			第9図154	14K24	加曾利B3~安行1	1/2	II	
			第9図155	14K23	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	
			第9図156	14K22	加曾利B3~曾谷	鉢部	II	
			第9図157・158	SK052	加曾利B2~B3	2/7	II	
18	千葉県八千代市大和田新田	芝山遺跡	第9図159	104号住居跡	加曾利B2~B3	2/3	II	22
19	千葉県我孫子市下ヶ戸	下ヶ戸宮前遺跡	第9図160	6号住居跡	加曾利B2~B3	2/3	II	23
20	千葉県佐倉市井野	井野長割遺跡	第9図161	包含層?	加曾利B2~B3	完形	III	24
			第9図162	T5	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	
			第9図163	東斜T	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	
			-	包含層?	加曾利B2~曾谷	5点	II	
-	-	土坑等	加曾利B2~曾谷	2点	II			
21	千葉県銚子市八木町	八祖遺跡	第10図164	包含層	加曾利B2~B3	釣手部	II	28
			第10図165	包含層	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第10図166	包含層	加曾利B2~B3	釣手部	II	
			第10図167	包含層	加曾利B2~B3	釣手部	II	
22	千葉県白井市平塚	寺向遺跡	第10図168	包含層	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	29
23	千葉県佐倉市下志津新田	神楽場遺跡	第10図169	包含層	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	30
24	千葉県柏市舟戸	中山新田1遺跡	第10図170	包含層	加曾利B2	鉢部	II	31
25	千葉県八千代市桑橋	本郷台遺跡	第10図171	包含層	加曾利B2~曾谷	釣手部	II	32
26	千葉県佐倉市白井田	遠部台貝塚	-	包含層	加曾利B2~B3	2点	III	33
27	千葉県山武郡芝山町牛熊	高谷川遺跡	-	包含層	加曾利B2	釣手部	II	34
28	千葉県印旛郡酒々井町	墨古沢遺跡	-	包含層	加曾利B2~曾谷	9点	II	35
29	千葉市緑区おゆみ野	六通貝塚	-	包含層	加曾利B2~B3	7点	II	36
30	千葉県君津市三直	三直貝塚	-	-	加曾利B2~B3	複数	II	37